英語学修の呪縛から逃れる道はどこにあるのか？（4）―英語修得のための課題とその解決―

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: OTOMO, Nobuhide メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00063880

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

英語学修の呪縛から逃れる道はどこにあるのか？(4)
―― 英語修得のための課題とその解決 ――

Is there any way to rescue Japanese people trapped under the spell of learning English? (4)

大　友　信　秀

(6) 日本語には主語がない（必要ない）ため、主語が必要な英語をそのままでは理解できない。

①日本語における主語とは何か

「日本語には主語がない。」と言うと、「いいえ、学校では、国語の時間に主語について学びました。」とか、「学校の受験でも、国語の問題で主語を問うものが出題されていますよ。」というような反応が予想できる。

確かに、学校では、「主語というもの」を学習する。ただし、それは、「意味上の主語」と呼ばれるものであり、「は」や「が」という主格で特定できるものではない[1]。つまり、日本語の主語は、英語のように構文構造から導き出せるものではなく、文を読んでその文の全体の意味を理解して初めて導き出せるものということになる[2]。

日本語を母語とする者にとっては、このように考えても、すでにそのような「意味上の主語」が含まれる日本語文の作成方法を習得しているのである

1　金谷武洋『日本語に主語はいらない－100年の誤謬を正す－』（講談社、2002）66頁は、「田中さんにこの問題は解けない」の「に」が主語のマーカーとされることもあるとの例で、このことを示している。

2　同上64-67頁は、このような問題構造、すなわち、日本語における主語というものの存在は、構文的には証明できないことを論証している。

から、「なるほど、日本語とは、そういう構造なのか。」と後付けで納得したことにすれば済むが、日本語を外国語として学習する者にとっては、文の構造という外観から主語を導き出せないというのは、文法が役に立たないことを意味する（日本語を習得するためには文法という目印が必要なのに、日本語を習得するまで、その目印に気づくことができないというトートロジーの沼に入って抜け出せなくなる。）。

なぜ、このように、英語では特定可能な主語というものが、日本語では特定困難（もしくは不可能）なのか。日本語には英語における主語というものがないのではないか、という疑問を生じさせることにもなる。

日本語における主語の特定に関わる、主語とは何かという問題については、これまで様々な学説が示されてきた。そのうち、主語と呼ばれるものを構文的に（外形的に）分類しようとするものは、一般に主語と呼ばれるものには、それぞれ、1）主格、2）主題、3）主語と呼ばれる３者があるとしている[3]。そして、2）と 3）は、何とかして、日本語にも主語があることを見出そうとするが、英語の主語と同様のものを主語と見ようとする 1）の観点から日本語を見ると主語というものはない（もしくは必要ない）ことになる[4]。

②日本語に主語は必要か

日本語学の世界でも、主語というものの定義が一つに定まっておらず、また、有力な学説の一つが日本語には主語はないとしている。このような状況を前提にすれば、仮に、日本語に主語があるとしても、それが文法的に特定できない「意味上の主語[5]」として学校では教えられている状況であれば、端

3　三上章『文法小論集』（1970、くろしお出版）64頁、56頁、原田信一「構文と意味」『シンタクスと意味　原田信一言語学論文選集』（大修館書店、2000）（初出1973）475頁、庵功雄『『象は鼻が長い』入門』（くろしお出版、2003）39頁参照。

4　三上章『日本語の論理』（くろしお出版、1963）67-68頁参照。

5　主語を意味上の基準によって定義しようとするものについて、臼田寿恵吉『日本口語法精義』（1909、松邑三松堂）237頁、鈴木重幸『日本語文法・形態論』（1972、むぎ書房）

的に日本語には主語はないとする教育の方がはるかに重要だと考えられる。

なぜなら、日本人が英語を学習する際には、どうしても母語である日本語との比較を避けて通れず、関係ないもの同士をわざわざ比較しても意味がないからである。最初から比較する対象がないことがわかっていれば、そのように対応することができるのに対して、関係性がないものを関係あるものとする誤った理解に拘束されると、いつまでたっても、答えにたどりつけないことになる。

英語で学会発表する日本在住の研究者は、現在ではそれなりの数に達すると思われるが、留学経験があるか、海外滞在期間が長い等の事情がない限り、学会発表はできても、他の研究者との日常会話での交流は苦手ということが多い。このようなことは、上記の日本語文法があいまいであることに起因していることがよくわかる。専門分野の説明に関しては、英語の主語＋動詞という構造を利用して行うことができるが、日常会話については、日ごろ、主語＋動詞という構造で行っていないため、これを英語にしようとしても、混乱してしまうからである。

このように、日本語に本来ないはずの主語をあるものとみなして、わざわざ、日本語を英語と類似するものとする我が国の国語教育の異常さが実は日本人が英語が苦手という理由になっていたのである。

6. 日本人のための英語修得実践法

(1) 実践のための課題の整理

①アウトプットの意味を理解すること

1) アウトプット（他人に自分の意思を伝えること）はしたい。

子供は、言葉を使って意思を伝えられるようになるまで、ジェスチャーで意思を伝えようとしたり、泣くことで、何かを必要していることを伝えよう

61-63頁参照。

する。言葉を的確に発音できるようになるまで、子供はこれを繰り返して、大人に自分の意思を伝えようとする。おおよそ子供が言葉で自分の意思を伝えられるようになるのは早くても２才頃であるため、大人はそれまでは子供は言葉を理解できないと考えていることも多い。

しかし、子供をよく観察していると、１才頃から、ある程度の意思疎通は可能であり、単純にそれが言葉では伝えられないことがわかってくる。そのような状態の子供に意思伝達の道具を与えるとどうなるのか。言葉の発声を修得する前の子供に手話を学習させると、自分がほしいもの、好きなものを手話で大人に伝えるようになる[6]。このことから、言語情報のインプットとアウトプットに時間差があることがわかる。

そして、子供が自分の意思を他人に伝えること、すなわち、アウトプットをしたがっていることにも気づく。

2）でも、それを英語でする必要はない

言語で意思を伝えられない子供は、手話を喜んで使うが、言葉を的確に発声できるようになると、言葉よる意思伝達の手段のみを選択するようになる。

また、英語の動画を楽しんで見ている、したがって、英語をある程度理解している子供も、意思を伝えようとする相手の大人が日本語を理解する場合には、その大人には英語で話しかけようとはしない。このことに関連する行動として、英語で話しかけられても、その人物が日本語を理解することがわかっていると、日本語で応えるようになるということも見られる。

これらのことからわかるのは、子供は、必要を感じなければ、もしくはより簡単な方法があれば、それに応じて別のアウトプット方法を選択するということである。

6　Rachel ColemanのSigning Timeシリーズは、子供向けの英語手話学習動画である。日本語で物の名前を発声できない子供に同シリーズを見せると、すぐに、手話で物の名前を表現できるようになる。

3）アウトプットを促す環境の整備

上記のアウトプットに関する子供の行動が示すことは、アウトプットを推進するためには、アウトプットをしなければならない環境が不可欠であるということである。日本では、日常生活を送る上で、英語を利用する必要性は極めて低いため、この課題を克服することが、英語を修得するために極めて重要な点になる。

（未完）